

近畿地方の万葉集と風景画シ立リーズ（第二十六回）

かづらぎやま

「葛城山の雲」

はるやなぎ かづらぎやま

春楊 葛城山に たつ雲の 立ち

ても坐いても 妹いもをしそ思ふ

卷十一—二四五三 柿本人麻呂歌集

（解説）葛城山の山の上にもいつも立っている白い雲のように、妹（＝妻や恋人）のこと思い出されて居ても立ってもいられない。といった男歌

（1）この歌に詠われている「葛城山」は奈良盆地の南部西縁の奈良県と大阪府の境に屏風のように高くつらなっている葛城連山の総称であって南の金剛山（こんごうざん）（1、125m）を主峰とし、その北に現在の葛城山（かづらぎやま）（959m）さらに北に二上山（ふたかみやま）（標高、雄岳517m・雌岳474m）とつづいてい

（2）「葛城」は山も地名も今は「かづらぎ」と読むが、古くは「かづらき」であつたらしい。

（3）初句の「春楊」は春に芽吹く楊の枝を頭髮に飾って「かづら」にするとところから「葛城山」の枕詞にしているといわ

れる。

(4) この歌の題詞は「物に寄せて思いを述べた歌」の一首であり、その物を「いつも見ている葛城連山に白雲が立つ雲」にかけてうたった民謡風の歌であろう。

(参考文献) 犬養 孝著「万葉の旅」山崎しげ子著「万葉を歩く」他

(写生地)

御所駅(近鉄御所線)から西へ約3km離れた「葛城山ロープウェイ駅へむかう道路の途次から葛城山の南端とその後方にそびえる金剛山の風景を描く。(池田杏花)

